

ミステリ読書案内

2025. 2. 2 発行元

第 632 号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。今回はあまり目立たない作家の作品を取り上げてみた。「大傑作」とは行かなくてもそれなりに楽しめる作品はたくさん出ているような気がする。

世の中の情勢が変化して…

今、この原稿を書いているのは12月中旬。世界情勢は刻々と変化している。ウクライナのこと、パレスチナのこと…とと思っていたが、韓国で「非常戒厳」が出されて混乱に陥り、政権が一気に崩壊の流れになってしまった。「今時こんなことが…」と思うのだが、現実には起こっているのだから不思議だ。

そしてまた、シリアでは反政府勢力が首都を陥落させ、アサド政権が消え去った。シリアという国はいろ

んな勢力が入り乱れている国で、今後どんな国作りをしていくのが心配だ。少なくとも他勢力とも融和が進み、流れ出ていた難民が戻る方向になるとよいのだが…。

ミステリもこんな世界情勢と無縁ではないのだから、今後これらの変化がどう描かれていくのかを見ていきたい。新しい年がスタートし、日本の国会の動きもなかなか先が見えないし、アメリカのトランプ政権の動きも気になる部分が多い。平和で安心して暮らせる世の中が一番大切なことだと思っている。

平谷美樹「貸し物屋のお庸謎解き帖」

9月に大和書房のだいわ文庫から出た本。シリーズ通算8作目。副題は『夏至の日の客』。江戸で貸し物屋を開いているお庸の店に奇妙な物を借りに来る客の謎を探っていく話。シリーズが進むにつれ、だんだん怪奇絡みの話が多くなってミステリ味は薄くなってきた。

第四話の『揚屋町の貸し物』では吉原の女郎が赤ん坊を三人貸してほしいと言ってきた。赤ん坊は店に準備してはいないが、工夫次第ではなんとかならないものでもない。問題は赤ん坊が何に使われるものなのかということ。お庸は吉原大門の前に立って、事の次第を解き明かそうと調べ始める…。裏の事情を聞き出すと…。5編が収録された短編集。

阿泉来堂「バベルの古書 猟奇犯罪707マイル Book3 肖像」

7月に角川ホラー文庫から出た本。シリーズ三作目。『変身』『怪物』に続いて『肖像』となった。前巻までは「バベルの古書」との結びつきが今一つ不明のままだったが、本書になってようやくその姿がみえてくるようになった。基本的には北海道警「特別事案対策班」が捜査を進める警察小説の形態を取っている。猟奇殺人を追いかけていくと不思議な「BABEL」の印のついた本に出くわすという流れ。本書では札幌市で肖像画そっくりの姿で男が殺されている事件が発生。20年前から年を取らない男の目撃情報がある…。初めは「捜査支援分析室」所属の刑事・天野伶佳が中心になって展開していくのだが、途中で敵の手に落ちてしまって…。そこから加治谷悟朗と浅羽賢介のコンビが活躍し始めて…。

澤村御影「准教授・高槻彰良の推察11」

11月に角川文庫から出た本。シリーズ11冊目。副題は『夏の終わりに呼ぶ声』。「民俗学ミステリ」と言いながらも怪異伝承を中心にしたホラー系の作品。今回は「影取り」から。

前半のドッペルゲンガーの話にはミステリの要素があるけれども、メインとなるゼミの夏合宿での出来事は完全に異界とのつながりに進んでいく。高槻准教授と学生・深町との関係はシリーズを順に読んでこないと理解しがたい部分があるのはいつものとおり。二人が抱えている過去の因縁についてはわずかの前進がある。富士山の青木ヶ原樹海での展開になる。高槻准教授に多大な影響を与えている祖父の……。

斜線堂有紀「ミステリ・トランスミッター・謎解きはメッセージの中に」

9月に双葉社から出た本。雑誌『小説推理』に掲載された5編を集めた短編集。私は斜線堂有紀の作品を読むのはこれで三冊目だが、いろんな作風のパターンが作れる作家だと理解している。私がミステリに求めているもののひとつは「本格謎解き＝パズラー」なのだが、この作者はその形式だけでなく、もう少し幅があるように感じている。日常から少し離れた特殊設定の構想が得意なようだ。

第二話の『妹の夫』。SFの設定。翻訳機が発達し、外国語を学ぶ必要がなくなった時代。宇宙船も進歩して遠い星までワープすることが可能になった。荒機務はその宇宙船に乗って遠い星まで行くことに。ロケットの中で地球にいる妻の姿を映像で見ることができるようになっていたのだが…。宇宙船がワープを抜け出した瞬間に翻訳機が故障して日本語が通用しなくなってしまった。さて、どうやって意思を伝えることができるのか…。宇宙空間で通信のやり取りが簡単にできるとは思われぬのだが…。